

○乗用馬生産組合の解散

半世紀にわたって内国産乗用馬生産の活動を続けてきた遠野市乗用馬生産組合が、2025年3月31日をもって解散することになりました。今後の遠野の乗用馬生産は、「遠野馬の里」に設立予定の新団体によって継続されます。



現役時代、障害競技で大活躍したハリーベイ（2021年2月28日 遠野馬の里にて）

○遠野馬産の過去と未来

遠野馬産の歴史は、馬産に適した自然環境に恵まれていたこともあり、この地域の先住民族が蝦夷とよばれていた奈良時代まで遡るといわれます。藩政時代には南部馬、その後明治、大正、昭和を通じて軍馬や農耕馬など遠野には5000頭以上の馬が飼養され、馬のセリ市には全国から購買人が集まり賑わっていました。けれども終戦後は社会生活の大きな変化により、全国的に馬の需要が激減したことは多くの人が知るところです。遠野も例外ではなく馬の飼養頭数は減少の一途を辿り、馬産地遠野から馬の姿が消えるという事態は当時のマスコミでも取り上げられました。そんな折、全国でスポーツとしての乗馬が普及し始めたことにより、遠野は馬産地としての復興をかけて乗用馬生産を開始したのです。1971年9月、馬産愛好家70人によって遠野市乗用馬生産組合が結成されました。日本馬事協会や日本中央競馬会(JRA)など各中央馬事団体の協力を得て、乗用馬の種牡馬や繁殖牝馬が遠野に無償で貸し付けられることになり、組合員が飼養していた馬たちとの交配によって中間種の乗用馬生産が始まります。そして1974年10月には第1回目の遠野市乗用馬市場が開催されました。翌年11月には乗用馬育成センターが完成し、遠野は内国産乗用馬の生産地として復興を遂げていきます。1998年3月、乗用馬育成センターが「遠野馬の里」として生まれ変わると、乗用馬や農用馬の繁殖改良、育成調教、市場の開催などの業務のほか、乗馬教室やふれあい体験、市内の各種イベントへの参加など多岐にわたる業務を担うようになり、今日まで乗用馬生産組合と両輪で多くの活躍馬を送り出してきました。けれどもこの数年は生産者の高齢化で組合員数が激減し、後継者不足が深刻化していました。さらに、馬の里で繋養される種牡馬や生産者が所有する繁殖牝馬の高齢化も進んで子馬の受胎率が低下、期待を集めて新たにスタートした海外の優秀な種牡馬の輸入凍結精液による受胎率も芳しくなく、組合員が生産する子馬の数が大幅に減ってしまいました。近年の国内の乗用馬生産状況の変化によって組合を取り巻く環境が大きく変わったことで従来の組合活動が続けることが困難であることから、2月18日に開催された臨時総会において遠野市乗用馬生産組合の解散が可決され、半世紀にわたる活動は3月31日をもって幕をおろすことになりました。組合解散後の遠野の乗用馬生産は、遠野市畜産振興公社（遠野馬の里）で設立される新団体によって継続されます。馬産地遠野は未来に向かって新しい歴史を刻もうとしています。

遠野馬通信

馬産地遠野とホースマンを結ぶ
情報誌

No.100

2025年3月1日